

## 第14話 日露戦争

ロシアの不信。満州撤兵の約束を果たさないのみか、却って韓国の北境を占領  
 さえる。隠忍を極めた我が交渉に対する彼等の無誠意からついに日露戦争が起こる。  
 徹頭徹尾わが大勝に終わっておおいに我が国威があがる。ポーツマス条約の締結。

### ロシアの不法

ロシアが清国に約束した第一回の満州撤兵の期日は明治35年10月8日でした。彼れは先づ遼河  
 以西の駐屯地を撤退して、その約束を履行するかの様子をみせたが、その実、これは遼河以西が彼れにと  
 って大した痛痒を感じないところであったからで、真に誠意があつての事ではなかったことは、次の撤兵  
 期日である翌36年4月8日になって明らかに分かった。この時、彼れは撤兵の準備さえしなかつたばかり  
 りか、却って吉林省の兵を韓国の北境に移して、これを占領した。のみならず、新たに清国政府に不  
 法な要求を提出したり、旅順に東亜太守府を設けて、関東総督アレキセーフをその太守として極東経営  
 に当たらせた。

### 日本の協商原案

斯うして、満州がもしロシアに併呑されては、韓国の独立が危うくされるようになれば、すぐに我が  
 国の安危にもかかわり、東洋の平和は保たれるべくも無いのですから、わが政府はこの年6月20日、御前  
 会議を開いてロシアに対する我が大方針を決定し、7月28日、駐露公使栗野慎一郎に、露国政府と直接  
 に交渉を開かせることにした。

それで、栗野公使が7月31日にその旨を露国政府に告げると、彼れは喜んで交渉に応じる意のあるこ  
 とを言明したので、すなわち8月12日に、我れは協商の基礎となるべき原案を提出した。清、韓両  
 国の独立および領土保全を尊重し、且つ清韓両国における各国商工業のために機会均等の主義を維持す  
 る事、および露国は韓国における我が国の優越権を承認するかわり、我が国は満州の鉄道の経営につい  
 て露国がもっている特殊の利益を承認する事、等々の条件でした。

### ロシアの対案

ところが、露国政府は、この提案を交渉の基礎とすることを拒んで、10月3日になって漸く別に一  
 つの対案を提出した。それに拠ると、彼れは清国の独立および領土保全の尊重はこれを拒み、満州およ  
 びその沿岸を全く我が国の利益の範囲外に置くことを要求した上に、韓国における我が自由行動にも種々  
 の制限を設けて、なおその上に、韓国領土の北緯39度以北の部分は中立地帯と看做して、そこえは両国  
 共に軍隊を入れないことにしようというのでした。即ち、満州は全くロシアでこれを独占して、ただ韓  
 国における日本に利益だけを制限しようというのです。

もとよりそんな事が承知の出来る筈がなかったので、我が政府は更に10月30日に修正案を出して、  
 再考を促した。これが最初の提案に比べて、ずっとロシアに取って有利なものであったことはいうま

## 第14話 日露戦争

でも無いが、それにも拘わらず、彼れはわざと返事を延ばして、我が国からたびたび催促を受けて、やつと12月11日になって第二の提案を提出して来た。ところが、これには満州の事は全く省いて、協商の範囲を韓国に関する事だけにして来た。第一の対案より更に一層横暴なものにして来たのです。

### 日本の修正案

いうまでもなく、この協商は満、韓両地における彼我の利益範囲を相互に承認して、将来、両国の間に衝突などの起こらないようにしようというのであるのに、彼れの態度はますます暴慢になるばかりであって、妥協の精神は少しもこれを見ることが出来なかった。しかし、なお我が政府はあくまでも平和の間に事をまとめようと望んだので、更にまた12月21日、彼れの第二の対案に対する修正案を提出した。露国政府はこれに対して、明治37年1月6日付で解答して来たが、殆ど何らの譲歩もなく、もとより満州独占の決心は断じてこれを変えなかった。

### ロシアの開戦準備と日露の国交断絶

のみならず、更に1月13日付で我が政府が提出した最後の修正案に対しては、その後三週間を経過しても何らの回答も与えないで、一方、しきりに大兵を満州に送り、有力な艦隊を東洋に派遣して、ますます軍備を盛んにした上、しだいに韓国の北境に迫って、我が国を兵力で威圧しようとした。こうなってはもうとても平和の手段で解決はつけられなかった。我慢に我慢をして来た我が政府も、ついに堪忍袋の緒を切って、明治37年2月6日に、懸案の談判および外交の関係を絶ち、帝国の既得権および正当の利益を守るために、自由行動を取ることを露国政府に通告した。

そのころ、我が海軍の主力は三艦隊七戦隊から成っていた。第一艦隊は第一、第三の2戦隊から成り、海軍中将 東郷平八郎が司令長官で、第二艦隊は第二、第四の2戦隊から成り、海軍中将 上村彦之丞が司令長官、第三艦隊は第五、第六、第七の3戦隊から成り、海軍中将 片岡七郎が司令長官でした。そして、更に第一、第二の艦隊を合して連合艦隊を組織し、東郷中將がその司令長官になっていた。

一方、ロシアの太平洋艦隊は、根拠地の旅順にその主力を集中し、ウラジオストックに巡洋艦リュウリクから四隻を置き、仁川に巡洋艦ワリャグ、砲艦コレーツの二隻を派遣していた。

### 連合艦隊の出動

すでに国交が断絶すれば軍事行動に出るのに何の躊躇も要しない。2月6日、露艦襲撃の命を受けた東郷総合艦隊司令官は、各戦隊を率いて長崎の佐世保を発し、7日途中、朝鮮の木浦沖で、海軍少将 瓜生外吉の率いる第四戦隊と別れて、これには韓国臨時派遣隊となって京城に赴く歩兵第23旅団(旅团长陸軍少将 木越安綱)を載せた運送船を護送して仁川に向わせ、自分は第一、第二、第三の3戦隊を率いて威風堂々と旅順をさして進んだ。

### 第1回の旅順口攻撃

こうして8日の夜、先づ駆逐艦隊に港口に停泊している敵艦隊を襲撃させた。折から、敵の多くの

## 第14話 日露戦争

将卒らは陸上に上がって少しも警戒していなかったので、我れは闇に乗じて敵艦間近に迫り、水雷を放ってその三隻に大損害を与えた。そして翌9日、更に全艦隊をもって総攻撃を開始し、僅かに40分足らずの間に、またまた敵の四隻に殆ど戦闘力を失うほどの大損害を与えたが、黄金山砲台からの砲撃が頗る猛烈で、長くそこに留まっていると、我にも死傷者を多く出す心配があったので、午後零時35分、早くも交戦を止めて、仁川をさして引き上げた。

この両日の戦いで、敵は36名の死者と120名の負傷者を出し、主力艦13隻のうち7隻は殆ど戦闘力を失い、残りの4隻もまた多少の損害を受けて、損傷のなかったものは僅かにただ2隻に過ぎず、駆逐艇4隻もまた戦闘力を失った。これに反して、我は僅かに4名戦死者と54名の負傷者を出したばかりで、艦艇の受けた損害も極めて軽微で、殆ど言うにも足りないくらいでした。

### 仁川沖の海戦

又、さきに仁川に向った第四戦隊は、8日の夕方から夜半にかけて、無事に陸兵の上陸援護の任務を終えると、9日午前7時、瓜生司令官は先づ露艦ワリャグ、コレーツの2艦に対して、正午までに港外に出るように命じ、同時に仁川停泊中の列国軍艦に対して、「露艦がもし9日正午までに出港しなければ、これを港内で砲撃するから、列国軍艦はその錨地を変更されるように」という趣意の希望を通告した。そして露艦の2隻が港外に出るのを待って、午前零時15分から、これと砲火を交え、交戦約35分で敵の戦闘力を全く失わせた。敵の2艦は辛うじて港内に退いたが、午後4時半ごろ、ついに相ついで自ら爆沈した。

### 宣戦の詔勅

このように開戦の劈頭第一で、旅順に、仁川沖に、我れは彼れを小気味よく撃破して、機先を制したので、この勝報が国内に伝わると、我が国民は挙って歓呼の声をあげた。この時、2月10日付で以下の宣戦の詔勅が煥発された。

天佑を保有し、万世一系の皇祖を踐める大日本帝国皇帝は、忠実勇武なる汝有衆に示す。  
朕はここに露国に対して戦いを宣す。朕の陸海軍は宜しく全力を極めて露国との交戦の事に従うべく、朕の百僚有司は宜しく各々その職務に従い、その権能に応じて国家の目的を達するに努力すべし。凡そ国際条規の範囲に於いて一切の手段を尽くし、違算のない事を期せよ。  
惟うに文明を平和に求め、列国と友誼を篤くして、以って東洋の治安を永遠に維持し、各国の権り利益を損傷せず、永く帝国の安全を将来に保障する事態を確立するのは、朕が夙に国交の要義として、朝夕敢えて違わない事を期す。朕の有司も又能く朕の意を体して事に従い、列国との関係は年を逐うて益々親厚に赴くと見ている。しかし、今不孝にして露国と鬯端をひらくに至る、豈朕の志ならんや。

帝国の重きを韓国の保全に置くのは一日の故に非ず。是両国累世の關係に因るのみならず、韓国の興亡は実に帝国の安危の繫る所なればなり。然るに露国はその清国との盟約および列国に対する累次の宣言にも拘わらず、依然として満州を占拠し、ますますその地歩を強固にして終にこれを併呑せんとしている。もし満州が露国の領有に帰せば、韓国の保全は支えられず、極東の平和もまた素より望めない。故に朕はこの機に際して、切に妥協によって時局を解決し、以って平和を恒久に維持すことを期し、有司に露国に提議し、半年の久しきに亘り、屢次折衝を重ねさせた。しかし露国はひとつも交譲の精神を以ってこれを迎えず、空しく日を費やして徒らに時局の解決を遷延させて、陽に平和を唱道し、陰に海陸の軍備を増大し、以って我れを屈従させようとする。凡そ露国が始めから平和を好愛する誠意なるものが毫も認める事ができない。露国は既に帝国の提議を容れず、韓国の安全はまさに危急に瀕して、帝国の国利は將に侵迫されんとしている。事既にここに至る、帝国が平和の交渉に依り求めんとする將來の保障は、今日では之を旗鼓の間に求める外ない。朕は汝有衆の忠実勇武に依頼して、速やかに平和を永遠に克復し、以って帝国の光榮を保全する事を期す。

ぜんこくみん ようやく  
全国民の踊躍

遼東還付の苦杯を嘗めさせられてから正に 9 年、臥薪嘗胆して久しく報復の機を待っていた全国民は、この大詔を拝して踊躍した。悪辣、暴戾、嘗て我れに迫って還付させた遼東半島の一角を、彼れは今奪って極東経営の根拠地としているほどにも非義非道を極めた上に、更に我が生命線である韓国をさえ脅かそうというのです。この讐敵に対する我が国民の憤激噴怒が、凝って烈々天をも焦がすばかりの敵愾心となったのに不思議はない。

こうして 2 月 12 日、紀元の佳節に大本營を宮中に設けられ、天皇は親しく三軍を号令される事となった。

露国皇帝ニコライ 2 世も同じく 2 月 10 日に宣戦を布告した。この日、我が駐露公使栗野慎一郎は露都を引き上げて帰国の途に就いたが、わが国駐在の露国公使ローゼンも 11 日には東京を去り、12 日に横浜から仏国の郵船で帰国の途についた。

列国は局外中立を宣言した。

りよじゅんこうこうげき  
第 2 回の旅順口攻撃

さて、我が海軍は、すでに 2 月 8 日、9 日の旅順攻撃で、敵の艦隊に大損害を与えたけれども、まだまだこれを全滅させたわけでもなかったし、ウラジオストックにも相当の威力を備えた敵艦がいたので、安心して満州に陸兵を輸送するためには、第一に先づ、旅順の敵艦隊を圧迫して、黄海方面の制海権を我れに収めなければならない。そこで、2 月 11 日、わが駆逐艦 4 隻は折からの大風雪を冒して旅順に向かい、14 日の早暁、その港口に達して、敵の砲台および哨艇からの烈しい砲火を浴びながら敵艦に近づき、水雷を放って戦艦 2 隻に大損傷を与えた。すると、それからというもの、敵はいよいよ我が海軍の勇敢

## 第14話 日露戦争

もうげき きしゅう はいよ ちつきよ  
な猛撃、奇襲におびえて、敗余の艦船を深く港内に移して蟄居した。

### 第1回の旅順口閉塞

そこで我れは、今度は港口を閉塞して敵艦隊を封鎖し、再び港外に出て来ることの出来ないようにしようという案を立てた。すなわち運送船の中から老汽船5隻を選んで、これに石塊を積み込み、港口の適当な位置に至って、自ら爆破沈没させる事にした。

しかし、それには決死の乗組員が要る。各船毎に一人の指揮官と一人の機関長とは先づこれを任命したが、その他の閉塞隊員はすべてこれを連合艦隊の下士卒の中から募る事とした。すると、忽ちこれに応じる者が2,000余人の多さにのぼり、いづれも意気天を衝くの勢いで、中には血書して嘆願した者すらあった。必要な人数は総てで67人だけであるから、その志願者の中からこれを選んで、天津丸、報国丸、仁川丸、武揚丸、武州丸の5汽船にそれぞれ分乗させた。

こうして2月22日、この5隻の閉塞船隊は諸艦艇に援護されて旅順に向かい、24日の午前3時頃に、夜間の中を敵の砲火を冒して港口に突進した。そして目ざすところにそれぞれ船を留めて爆沈させると、急いで隊員はボートに乗り移って沈没船を去り、援護の駆逐艇隊に収容されて帰って来たが、なんという幸いか、この壮烈極まる行動において僅かに1名の戦死者、3名の負傷者を出したばかりでした。



ほうこくまる のりく ゆうし  
報国丸 乗組みの勇士

へいそく にんむ お きかん  
閉塞の任務を終えて帰艦  
した後の撮影。

ひろせ  
前列右から3人目が広瀬  
中佐。竹むしろで巻かれて  
いるのは重傷者。

### 第2回の旅順口閉塞

その後、わが艦隊は数回その港外に迫って敵艦に攻撃を加えて、彼れをますます萎縮させたが、しかもなお先の閉塞の数が十分ではなかったもので、敵艦は折々港外に出て来たりした。そこで、第二回の閉塞が企てられ、千代丸、福井丸、米山丸、弥彦丸の4隻の汽船で、閉塞船隊を組織して、新たに選抜した54名の下士卒を加えて全部で65名の閉塞隊員をこれに分乗させて、3月26日の夜、駆逐隊および水雷艇隊の援護の下に港口深く進んで、それぞれ爆沈させた。

### 広瀬中佐の壮烈な最期

こうせい ぐんしん うた ひろせたけお そうれつ さいご と  
後世から軍神と謳われた海軍中佐 広瀬武夫が、壮烈な最期を遂げたのはこの時のことです。彼は  
しゅび にんむ は  
第一回閉塞の時には報国丸の指揮官として首尾よくその任務を果たし、第二回の閉塞には福井丸の指揮官

## 第14話 日露戦争

となったのだが、いよいよ沈没船を去ろうして乗員をボートに乗り移らせた時に、上等兵 杉野孫七のいないのに気付いて、その名を連呼しつつ、急いで三度までも沈み行く船中を隈なく駆け回って探したのです。しかし、ついにその姿が見えないので、さては、さっきの敵の魚形水雷が中った時に戦死したのかと、残念な思いをしながら、断念して、自分もボートに飛び乗って、帰航の途についていたが、その折から、雨のように飛んでくる敵弾にやられて、ただ一片の肉塊と手にしていた海図の血に染まったのを跡に残したばかりで、その身は永遠に海中にさらわれたのです。

### マカロフ提督の戦死

とはいえ、この第二回の閉塞もなおその数が完全でなかったので、敵艦はやはり時々港外に出動したが、4月13日、海軍少将 出羽重遠の率いた第三戦隊の巧みな誘出に乗って、彼れは旗艦ペテロパウロスクを始め、すべて7隻で、むしろ攻勢を取るかのように図に乗って沖合い遠く出てきたところを、東郷司令長官の率いる我が第一戦隊が、にわかに側面から急進してこれを包囲しようとすると、敵艦隊は驚いて艦首をめぐらして、要塞援護の線内に逃げ込んだ。

ところが旗艦ペテロパウロスクはちょうど前夜に我がほうで敷設した機械水雷のあるところに向って行って、忽ちそれにかかって、天に沖する水煙、火柱と共に一大爆音を発して沈没した。これには世界有数の戦術家と言われた敵の司令長官マカロフ中将が乗っていたが、彼はその幕僚以下600余名の乗組員と共に、一瞬の間に海底の藻屑と消えてしまったのです。これが敵艦隊に取って、いかに士気を沮喪させた大打撃であったかは言うまでもありません。

### 第3回の旅順口閉塞

ロシア船はその後はもう港外にもめったに出ななかったが、しかし我れにおいては、完全にこれを港内に圧迫し尽くさなければ、艦隊の主力を陸兵の輸送に用いることが出来なかったのも、更に5月2日の夜、第三回の閉塞を断行した。港口に向わせた閉塞船は12隻でしたが、南東の強風が俄かに起こって、各船互いにそのいどころが分からないなり、ついに統一した行動が執れなかったにも拘わらず、8隻はよく港口に直進して、敵の猛烈な砲撃を冒しながら殆ど完全にその目的を達したのです。とは言え、この時は険悪な天気のために、閉塞後の隊員を収容することが容易でなかった事もあって、江戸丸の指揮官海軍少佐 高柳直夫、佐倉丸の指揮官海軍大尉 白石葎江らを始め、戦死したものが少なくなかったのです。

さて海軍がこうして黄海の制海権を我れに収めようとして全力を尽くしていた時に、一方、陸軍の行動はどうでしたか？

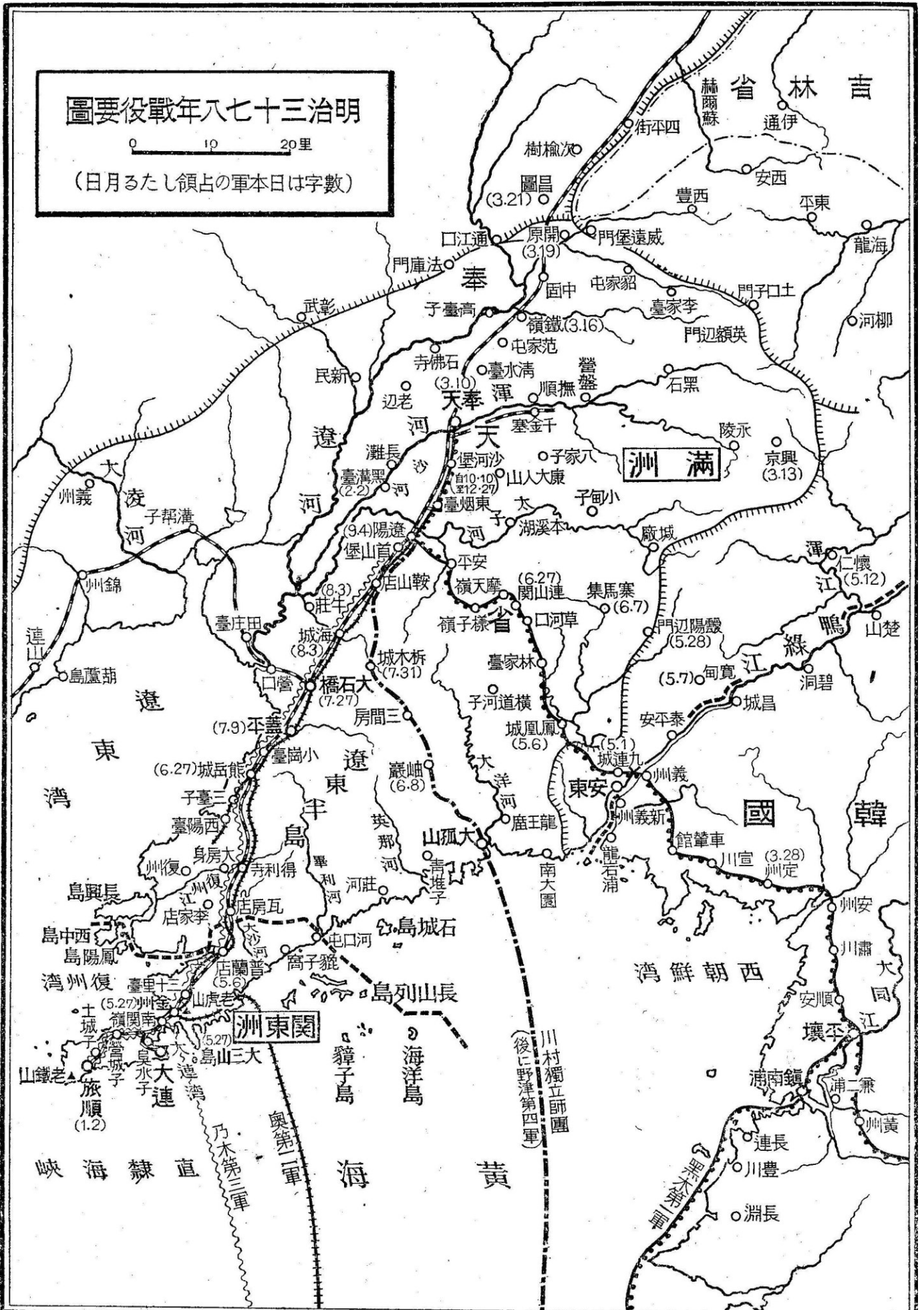
### 第一軍の行動

第十二師団の歩兵第23旅団が臨時韓国派遣隊として仁川に上陸したことは既に前に述べたが、これは近衛、第二、第十二の3師団で組織した第一軍の一部でして、この第一軍は陸軍大将 黒木為楨がその司令官としてこれを統べたのです。その全軍は仁川および鎮南浦に上陸してから、次第に北韓の露兵

圖要役戰年八七十三治明

(日月るたし領占の軍本日は字數)

0 10 20里



を掃蕩して、4月4日に義州に到り、5月1日には全軍一斉に鴨緑江を渡って、安東県、九連城、蛤蟆塘を陥れ、その六日には更に進んで鳳凰城を占領し、その翌7日には鳳凰城の東方に当たる鴨

## 第14話 日露戦争

りょくこう かんてんけん  
緑江上流の寛甸県をも占領した。 こうして、陸軍もまた最初から我れは大勝を博して大いに軍威が振  
ったのです。 ところが、敵はこれに反して、蛤蟆塘の包圍攻撃に軍団長ザスリッチ、師団長カウルスパ  
ウルスが共に負傷し、その他の損害も非常に多かったので、大いに士気が沮喪した。

### 第二軍の行動

この間に我が第二軍は、第一、第三、第四の3師団をもって組織され、陸軍大将 奥保鞏がその司令官  
としてこれを率い、第三艦隊の援護の下に朝鮮の鎮海湾に集まって待機していたが、すでに九連城を占  
領して、又、海軍の第3回の旅順港閉塞も実行されると、5月4日、鎮海湾を出発して翌5日、金州半島  
の鹽大澳に上陸した。 そしてその翌6日に普蘭店を占領して、北方の敵と旅順口との連絡を絶って、金  
州城に迫り、26日の未明に、折からの降雨を衝いて爆破、突撃、激戦数時間の後についてこれを陥れ、  
更に金州湾にまわった我が海軍の援助をも得て、敵が半永久と誇っていた南山の險を抜いた。 この  
南山の戦いは非常な激戦で、凡そ16時間にわたり、わが軍の参加人員36,000のうち、死傷者が実に4,300  
にも達したのです。 敵の死傷者が更に一層夥しい数であったことはいうまでもない。

### 遼東半島封鎖の宣言

こうして、ここに初めて満州における敵軍を南北に両断することが出来たので、この日、海軍は東郷  
司令長官の名で次のような遼東半島封鎖の宣言を發した。

本官は帝国政府の命を受け、明治37年5月26日、清国盛京省遼東半島南部、即ち貔子窩から  
普蘭店に至る一直線以南の沿岸を帝国軍艦の十分な兵力を以って封鎖し、且つ之を維持するこ  
と、並びに封鎖を破らんとする一切の船舶に対して国際法及び帝国と中立諸国との条約に於い  
て許容される一切の強制手段を用いることをここに宣言する。

### 得利寺の遭遇戦

さて、南山を占領した後、第二軍は更に軍を進めて、南関嶺、柳樹屯、青泥窪（今の大连）を占領  
して敵を旅順方面に圧迫し、その攻撃には新たに編成された第三軍に属することになった第一師団をとどめ  
てこれに当たらせ、本隊は、折から、旅順救援のために遼陽から南下して来た敵のスタケルベルグ将軍  
の率いる大軍を遊撃するために、北進した。 そして6月15日に得利寺で敵の2個師団と遭遇戦を戦い、  
猛烈を極めた戦鬪の末に、ついにこれを撃破して敵の砲兵2個中隊を全滅させさせた。 この戦いにお  
ける我が軍の死傷者は1,000人以上でしたが、敵においては師団長が傷つき、連隊長が戦死し、その他の  
死傷者が3,500人に達して、全く北方に敗退する外はなかったのです。 我が軍は勢いに乗じてこれを追  
いながら、更に北進して、同月21日には熊岳城を占領した。

これより先き、第十師団長陸軍中將 川村景明は独立軍を率いて大弧山に上陸し、第一、第二の兩  
軍の中間に進んで、互いに連絡を取りながら北上したが、6月8日には第一軍の一部隊と協力して舳巖を  
占領した。



## 第14話 日露戦争

### まんしゅうぐんそう しれいぶ へんせい 満州軍総司令部の編成

こうして我が軍が三道から並び進んで、次第に、当時の敵の本拠であった遼陽に迫る形勢をつくって行くと、我が大本営においては、満州における全軍を統率させるために満州軍総司令部を設ける事となり、6月20日、元帥陸軍大将 大山 巖 を総司令官に、陸軍大将 児玉源太郎を総参謀総長に任じ、7月6日幕僚以下を率いて東京を出発させた。

### へんせい 第四軍の編成

次いで、大弧山上陸軍（第十師団）に第五師団を合して第四軍が編成され、陸軍大将 野津道貫がその司令官に任じられた。それで、7月14日、野津大将は大弧山に上陸して 舳 巖 に至り、それより次第に軍を進めて、27日に分水嶺を占領し、31日には 橋木 城 を占領した。来るべき遼陽戦に中央軍として行動すべき位置を獲得したのです。

又、第一軍は6月27日に連山関を取り、7月1日に摩天嶺の嶮を奪い、その後、幾度かこれを回復しようとした敵の逆襲を撃退して強烈な戦闘を行い、同月19日には更に進んで細河沿、小侷子を占領し、その31日には様子嶺を占領した。遼陽戦に右翼として行動すべき地歩を確保したのです。

又、第二軍は、さきに熊岳城を占領した後、進んで7月9日に蓋平の敵を破り、総参謀長サハロフ中将以下を走らせた。同日、別に一支隊を西方に進めて營口をも占領した。そして8月3日には更に海城および牛莊を陥れて、遼陽戦の左翼としての位置を取ったのです。

こうして、全軍大挙して、いよいよ遼陽に迫ることになったが、その攻撃を語る前に、わが海軍のその後の行動を少しここに話しておきます。

### こうかい かいせん 黄海の海戦

さきに遼東半島の封鎖を宣言して以来、我が海軍はその区域を厳重に監視していたが、そのうち、陸上における旅順攻囲陣の作戦が着々と進むにつれて、旅順の港内深く蟄伏していた敵艦は漸くじっとしてはいられなくなって来た。敵の司令長官ウィットゲフト少将は、6月23日に一度脱出を企てて失敗したにもかかわらず、8月10日の早朝、更に大いに陣容を整え、旗艦ツェザレウィッチ以下の艦艇を率いて港外に出た。無理にも外海に脱出して、遠くウラジオストックの艦隊に合しようとしていたのです。

我が艦隊は予ねてそういう事もあるかと警戒していたので、哨艦の知らせを受けると直ちに出勤して、黄海にこれを追い討って激戦が数時間にわたった。はじめのうちは、敵も烈しく応戦しながら遁走の道を開こうと努めていたが、日の暮れ近く、旗艦ツェザレウィッチに我が砲弾が命中してウィットゲフト少将以下多数の者が戦死すると、敵は俄かに陣形を乱して思い思いに遁走し始めた。

その大部分は再び旅順に逃げ帰ったが、その余りは膠州湾、上海、その他の中立港に遁れて、それぞれ武装を解除された。ただ巡洋艦のノーウィックだけは当初の目的通り、ウラジオストックを指して遠く我が東海を迂回し、オホーツク海を樺太まで逃げ延びたが、同月20日、わが対馬、千歳の2艦

## 第14話 日露戦争

の追撃にあって、ついにこれもコルサコフ（当時の大泊）の近海で撃沈されてしまった。

こうして、敵は、この海戦に夥しい損害を受けたので、爾来、旅順の敵艦はただ全く僅かに余喘を保っているというに過ぎなくなった。

### ウラジオ艦隊の出没

また、一方、初めからウラジオストックに停泊していた4隻の敵艦は、開戦早々、2月11日に早くも北海道渡島の白神岬付近に現れ、おりから航行中の我が商船奈古浦丸を無法にも撃沈し、その後も時々わが国および韓国の近海に出没した。4月25,6日には、またもや突如、元山津に現れて我が商船五洋丸を撃沈し、その北方の新浦沖に運送船金州丸を撃沈した。これに対して上村中将の率いる我が第二艦隊は、たびたびウラジオストックの港口に迫って威嚇砲撃を試みたりして、彼れを誘い出そうとしたが、そういう時には、彼れはきまって港内深く潜んで姿を見せず、わがほうは止むなく引き上げた後に、こっそりとまた出動しては暴行を働くのを常とした。

6月15日の早朝、彼れはまた突如として3隻で対馬海峡に現れ、たまたま玄界灘を航行中の我が運送船常陸丸を撃沈し、将卒600余名の生命を奪い、佐渡丸をも傷つけた。上村中将の第二艦隊は硝艦の知らせでこれを知ると、急いで出動して追撃したが、おりから、生憎暴雨となって、濛気のために咫尺（注：遠近）を弁せず、ついに遺憾ながらこれを逸してしまった。と又、7月1日、彼れは3隻で対馬海峡に現れて、その後も苦心して搜索し続けていた我が艦隊に出会うや否や、忽ち全速力を出して逸走したが、同月20日には更に津軽海峡を過ぎて太平洋に出て、大胆にも東京湾口を窺い、伊豆沖から遠州灘を横行した上、ウラジオストックに引き上げた。

### 蔚山沖の海戦

「おのれにつっきウラジオ艦隊、ちょございな真似をばしおる！」というのが、その当時の我が国上下の憤った心でした。中には、上村艦隊に対して不平不満の声すら挙げた心無き者もあったが、幸いにも8月14日、即ち、かの黄海の海戦から4日の後、ウラジオに向って脱走を企てた旅順の敵艦と相応じて、3隻のウラジオ艦隊がこれを迎えに出て来たところを、上村艦隊は韓国の蔚山沖で発見した。

すなわち直ちにこれを包囲し、日頃の鬱憤を思い知れと、さかんに猛火をあびせて、ついにリュウリクを撃沈し、ロシア、グロモボイの2艦をも再び戦力の無いようにした。それでも2艦は、その快速力を利用して、からくもウラジオストックに逃げ込んだが、その損害がいかに大きかったのか、再び港外に出ることが出来なかったのか、爾来、日本海方面もまた安全となった。

それで、ここにロシアの太平洋艦隊はその実力が殆ど全く滅びて、極東の制海権は全く我が手に帰しました。

### 遼陽の戦

さて、一方、陸軍は、8月22日に我が満州軍総司令官からいよいよ遼陽攻撃の命令が諸軍に下った。敵の総司令官クロパトキンが、全力をつくしてこの要地に半永久的な防備を施して、わが軍をここに食

## 第14話 日露戦争

い止めて増援軍が本国から来るのを待って、一挙にして攻勢に転じ、これまで連戦連敗して来た恥を雪ごと目ろんでいたゆえに、我が方でこれに先立って敵の陣地を撃破しようとしたのです。

第一軍（黒木軍）は右翼として東方から進み、第二軍（奥軍）は左翼として南西方から、第四軍（野津軍）は中央部隊として南方から進むことにした。8月26日からいづれも前進運動を開始したが、戦線約40kmにわたって我が軍は常に攻勢を執って次第に敵を圧迫し、ついに9月1日の早暁、遼陽の死命を制する要害といわれる首山堡を占領した。

### 橋中佐の壮烈な最期

かの海軍の広瀬中佐とならんで、同じく軍神と崇められる陸軍中佐 橋周太が、第一弾を右腕に、第二弾を右手に、第三弾を腹部に受けてなお少しも屈せず、しきりに部下を激励しながら奮闘をつづけているうちに、更に砲弾の破片を腰部に受けた上に、胸を敵弾に貫かれて、ついに壮烈極まる最期を遂げたのは、実にこの首山堡の争奪戦に8月31日、歩兵第34連隊の第一大隊長として向った時の事です。

さしも頑強であった敵軍も、首山堡の堅塁が陥ると、次第に遼陽に退きはじめたので、我が軍は一斉にこれを追撃した。そのうち我が第一軍の一部が遼陽の北にまわって敵の退路を絶とうとする形勢を示すと、敵は忽ち周章狼狽して、大混乱を演じながら、遼陽をも棄てて走った。それで、9月4日の朝、我が軍がこれを占領した。実に、この遼陽戦は8月26日から10日間にわたる大戦争で、我が軍の死傷者は約17,500であったが、敵の死傷者は恐らく30,000内外に上ったといわれる。

### 沙河の会戦

こうして敵の総司令官クロパトキンは、遼陽を敗退して後、本拠を奉天において我れに対峙していたが、間もなく本国から新鋭の援軍が到着して、9個軍団、220,000の大兵となったので、すなわち10月2日、俄然に攻撃に転じて南下し始めた。先づ遼陽を回復して日本軍を撃滅し、その勢いをもって直ちに旅順の急を救おうとしたのです。ところが、我が軍は早くもこれを偵知して機先を制し、再び第一、第二、第四の3軍を並び進めて、沙河にこれを邀撃（迎え撃つ）した。

10月10日から両軍は砲火を交えた。我が右翼の第一軍は真っ先に優勢な敵の攻撃を受けて最も苦戦したが、やがて左翼の第二軍および中央部隊の第四軍が相ついで烈しく前進するにおよんで、第一軍も力を得て攻勢に移った。こうして激戦数日、ついに全軍一斉に進んで優勢な敵軍を破り、14日には全く敵を沙河以北に撃退して、敵のいわゆる攻勢運動を挫折させた。この会戦における我が軍の死傷者は約15,000でしたが、敵の損害は、戦場に棄ててあった死体だけでも10,000余りでしたから、全体では恐らく60,000以上に上ったろうといわれる。実に約一ヶ月前の遼陽の大会戦に優るとも劣らない大激戦であったのです。

この会戦以後、敵軍と我れとは沙河を挟んで相對峙して数ヶ月を過ごした。いわゆる沙河の対陣で、おのおの陣地を固めて冬営したのです。こうして、「有史以来の大会戦」と言われた奉天の大会戦が、翌38年の2月下旬から行われることになるのですが、その前に先づお話しなければならないのは旅順攻囲

## 第14話 日露戦争

軍の行動です。

### 第三軍の旅順攻囲

さきに南山を占領した後、第二軍が北上するに当たって、第一師団を旅順攻撃のために後に留めた事は既に前にも少し述べた通りですが、これは、その時、わが大本営において、旅順要塞攻撃のために特に第三軍を編成する事になり、陸軍中将 乃木稀典をもってその司令官に任じ、第一師団は第十一師団とともに共にこれに属することになったからです。乃木中将は、5月27日に東京を出発し、6月6日に大連湾に上陸したが、この日、陸軍大将に昇進した。

こうして、第三軍は旅順に向かって前進を開始し、6月26日には剣山、安子嶺などを占領し、7月2日、更に第九師団を加えて、3日には敵の逆襲を退け、26日には營城子、29日には双台溝、分水嶺子、大白山などを占領した。翌30日には鳳凰山、林家莊などを略取して着々とその陣地を進め、8月7、8、9日の3日にわたって大弧山および小弧山を占領し、更に14、15の両日には東北溝北方の高地から干大山、隋家屯西方の高地にわたる線を占領して、いよいよ敵を本防衛線内に圧迫し、わが海軍の有力な共同動作と相俟って旅順要塞の攻囲を確実にした。

### 敵将ステッセルの勸降拒絶

この時、明治天皇は敵の要塞内にいる非戦闘員が鉄火の惨害に遭うのを憐れに思われ、なるべくはこれを免れさせる事を望まれたので、参謀総長 山県有朋は聖旨を奉じてこれを満州軍総司令官 大山巖に伝え、大山総司令官は直ちにこれを旅順攻囲軍司令官 乃木希典に伝えた。そこで乃木大将は、8月16日に陸軍砲兵少佐 山岡熊治を軍使として水師營の敵陣に遣わし、連合艦隊司令長官 東郷平八郎と連署の書面を敵の司令官ステッセルに送って、聖旨を伝えると共に旅順の開城を勧めたが、ステッセルは翌17日、軍使を發して開城の勸告をも非戦闘員の避難をも共にこれを拒絶した。

そこで、我が軍はいよいよ総攻撃を行うこととなり、第一師団および後備歩兵第一旅団を右翼、第九師団を中央部隊、第十一師団を左翼、後備歩兵第四旅団を予備隊として、8月19日の早朝から、海軍の協力をも得て一斉に攻撃を開始した。我が諸軍は猛撃突進、鋭く敵壘に迫ったが、敵は天嶮に拠って頗る頑強に抵抗したので、実に強襲4昼夜にわたって、漸く2壘を陥れただけでした。

### 第一回の旅順総攻撃

そもそも旅順の要塞は、ロシアが明治31年以来、東洋の根拠地として全力をそそぎ、莫大なお金を費やして、天嶮を利用し、最新科学の粋をつくして防備を施した所謂難攻不落の堅城であった上に、これを守る者は露軍中でも勇名の高いステッセル將軍の麾下であったので、いかに勇猛無比な我が軍隊の強襲を以ってしても、容易に思うよう名結果を収めることが出来なかったのです。

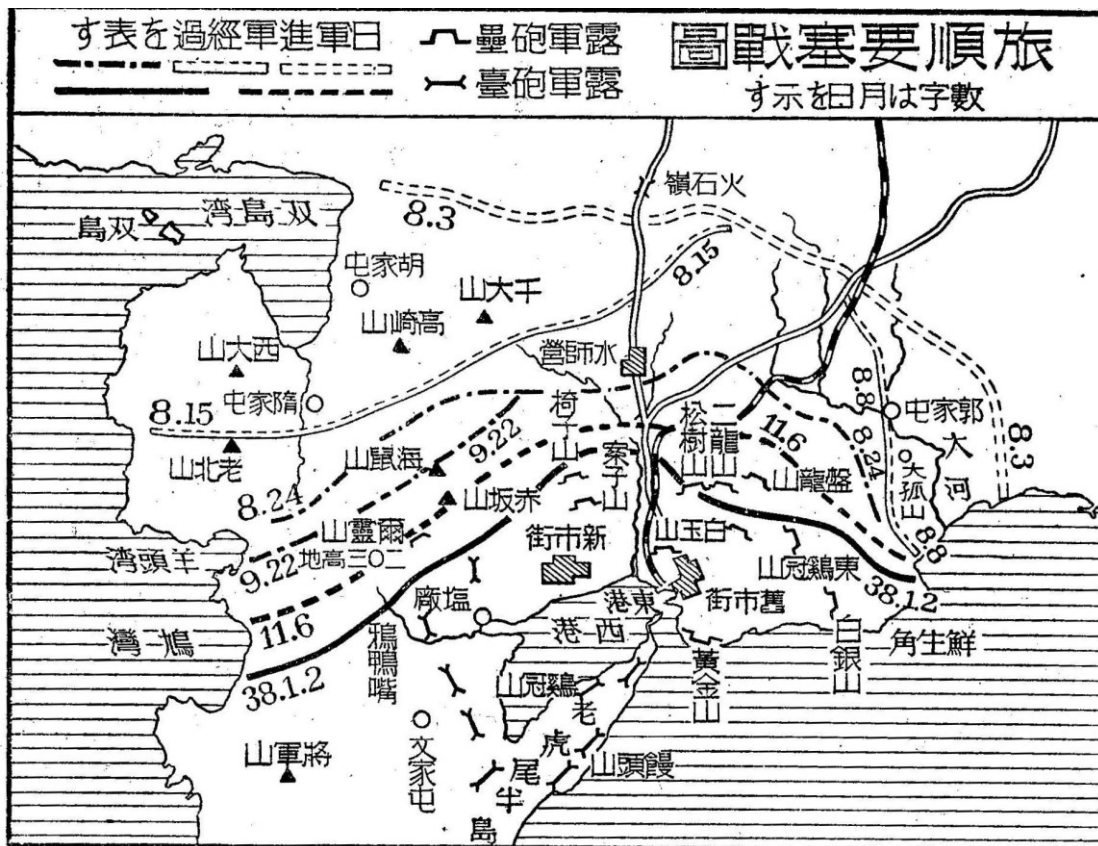
### 第二回の旅順総攻撃

とはいえ、乃木司令官はもとより老巧な將軍でしたし、部下の将士らはみな忠義義烈の人々でしたか

ら、一方で、攻撃の方法を変えると共に、ますます砲撃を加えることとして、9月19日から更に第二回の総攻撃を行った。右翼軍は 203高地、海鼠山、および水師營南方の堡壘に向かい、中央軍はクロパトキン砲台を襲い、左翼軍は敵を牽制する任に当たった。そして翌20日、先づクロパトキン砲台を奪い、ついで水師營南方高地の堡壘4基を奪い、海鼠山をも占領したが、203高地はこれを陥落させる事が出来なかった。

第三回、第四回の旅順総攻撃

それで、10月には新たに第七師団を旅順攻囲軍に加え、その26日から更に第三回の総攻撃を強行して、30日には松樹山、二龍山、東鶏冠山の外岸を占領して、11月26日からは第4回の総攻撃を行った。



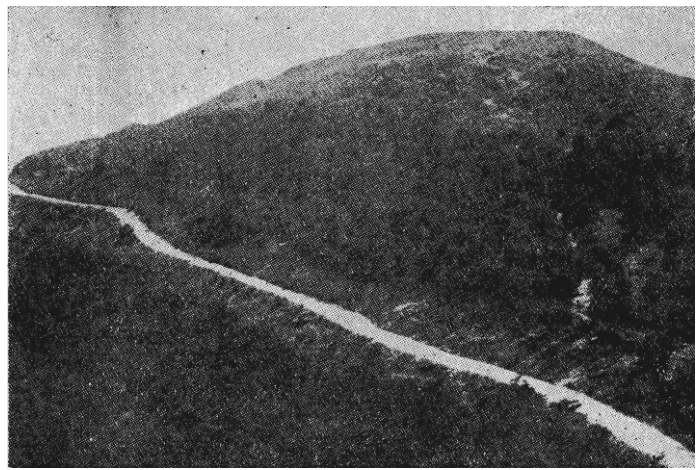
白樺隊の強襲

有名な白樺隊は、この夜、夜間特別予備隊をもって決行されたもので、その隊長は陸軍少将 中村寛でした。隊員の総数は3,083名で、第一、第七、第九、第十一の4師団から選抜した数大隊の歩兵と1小隊の工兵から成っていた。先づ松樹山予備砲台を奪取し、あわよくば白玉山砲台をも占領して、旅順の市街に突入しようというのがその目的でしたが、夜襲のことですから、敵の砲台に侵入しようとした時、敵と見方との見分けを容易にするために、おのおの白布を左肩から右脇に下にかけることにしたので隊の名は起ったのです。

けれども、この決死隊の強襲も、敵の頑強を極めた抵抗に遭って、勇戦奮闘、ついには爆弾を投げ合い、組打をさえするまでに至ったが、遺憾ながら空しく、夥しい死傷者を出したばかりで、その目的は達し得られずに終わった。

203高地の争奪戦

そこで、乃木司令官は、今度は203高地に主力を注いで、ぜひともこれを奪うことにした。第一師団長陸軍中将松村務本はその命を受けると、すなわち11月27日の夜から大挙してこれに迫って、28日の夜には一旦その大半を占領したが、ここは旅順の北西に当たり、はるかに軍港を見下ろし得られる形勝の地点ですから、敵もここを取られては



二〇三高地 (旅順要塞司令部検閲済)

死命を制される事となるので、忽ち獐猛な勢いで逆襲して来て、これを奪い還した。それで、乃木司令官は更に陸軍中将大迫尚敏の率いる第七師団を第一師団と協力させて、その攻撃に当たらせることにした。

こうして、30日に我が軍は再びその山嶺を占領したが、間もなく敵はまた勢い猛く盛り返して、これを奪い還した。激戦は連日つづけられた。身方も敵も死傷者を増すばかりでした。強襲して我れが奪えば、彼れは猛撃して来て取り返した。11月27日の夜から12月5日の夜まで8昼夜の間に5回占領して5回取り返されたが、ついにその翌12月6日の朝になって、我れは第6回の占領を確実にすることが出来た。

この8日8夜にわたる争奪戦が、いかに悪戦苦闘を極め、いかに夥しい損害を両軍に与えたかは、時々一時の休戦を約して、互いにその死傷者を収容しなければならぬほどだったというのでも分かるが、更に累々と積み重なった彼我の死体のために、山の形が変わったという有名な話が伝わっているのを知れば、一層その凄愴を極めたさまが容易に想像されます。

203高地が確実に我が有に帰した時に、乃木司令官が作って、折から戦況視察のために攻囲軍中に起臥していた地理学者志賀矧川(重昂)に示した有名な漢詩がある。

爾靈山嶮豈難攀 男子功名期克艱 鉄血覆山山形改 万人齐仰爾靈山

というので、この転句の「鉄血覆山山形改」は即ち死体のために山の形が変わったことを詠じたのです。この時、矧川はすぐに一首の古詩を作って乃木大将の作に和したが、なお、大将の功績を記念するためと、爾来、この高地を爾靈山と呼ぶ。

なお、この激戦中、12月1日に乃木大将の二男乃木保典少尉も敵弾を額に受けて壮烈な戦死を遂げた。乃木大将は、先に南山の戦いで、長男勝典中尉を失い、今また二男の保典少尉を失ったのです。もとより君国のためには身も家も何もかも捧げるのを当然の事としていたとはいえ、2子しかいなかった2子を共に失った大将のこの時の胸中は、さぞ断腸の思いであつたらう。しかもこの知らせを受けた時に、「うむ、そうか」と一言いっただけであつたと伝えられる。無量の感慨をそこに窺える気がします。

## 第14話 日露戦争

### 旅順の運命が決まる

さて、旅順の運命は、203高地を占領した瞬間に決したと言ってよいでしょう。この山上からは港内の敵艦も一々それと指図出来たので、それからというもの、我が砲弾は確実に敵艦に命中して、12月11日には既にその艦隊は殆ど全滅した。ただ戦艦サバスターポリーと数隻の駆逐艦とが港外に遁れ出たが、これも忽ち我が水雷艇の襲撃を受けて、その21日には全く戦闘力を失った。

こうして、敵の旅順艦隊はここに絶滅したのです。

### 陣中に迎えた愉快的新年

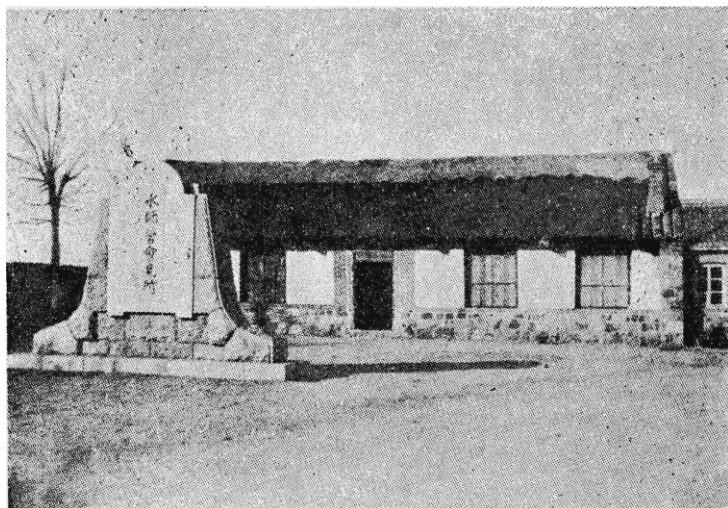
一方、陸上においても、我が攻囲軍は12月18日に東鶏冠山北砲台を陥れ、同28日には二龍山砲台を、同31日には松樹山砲台を陥れた。明けて明治38年1月1日、我が将士は勝って愉快的新年を迎えて、予ねて用意の餅や酒でめでたく君が代の万歳を祝い納めたが、しかし、そういううちにも攻撃の手は緩めなかった。この日の朝、H砲台および盤龍山新砲台を陥れ、午後には旅順要塞の最高点である望台を占領した。

### 旅順の開城

さすがのステッセルも、もはやいかんともすることが出来なかったので、「この上の抵抗は不要である」として、ついにこの日の午後5時頃、軍使を我れに遣わして降を請うた。そこで2日正午に我が参謀長陸軍少将伊地知幸介らと敵の参謀長レース大佐らとは水師營に会見して開城規約を定め、その日の午後4時35分をもって両軍共に戦争を停止した。こうして、さしもに金城鉄壁と歌われた旅順も全く我が手に帰して、日章旗は再び高く黄金山の上にひるがえったのです。

### 乃木将軍とステッセルとの会見

なお、この時の規約の一箇条に、敵の将校ならびに官吏に帯剣を許すことが規定されたが、これは明治天皇が、ステッセルがよく祖国の為に忠誠を尽くしたのを嘉賞になり、武士の名誉を保たせるようにとの言葉を下されたので、そのおぼしめしに基づいたものです。



旅順 水師營の会見所

それで、ステッセルに対しては、4日、乃木大将が特に使いを遣わして聖旨を伝え、宣誓の上は、家族と共に本国に帰らせる旨を告げた。ステッセルは大いに感激して、優渥なる天恩を感謝するために、乃木大将と会見の栄を得んことを求めて来た。



ステッセル と 乃木大将 との会見

そこで、翌5日、水師營すいしえいにおいて、両将軍は、きのうまで敵同士であった事は忘れたかのよう  
に、語る言葉も全く打ちとけて、  
つぶさに半年の苦戦くせんを語り合い、  
互いに攻撃と防御との巧妙こうみょうを  
称え合って其の労を犒ねざらった。  
そして別れに臨んで、ステッセル  
はその愛馬あいばを記念の為に乃木大  
将おおくもろに贈ることを申し出たが、いか  
にも軍人らしい美談びだんとして今日  
にも語り伝えられています。

こうして要塞全部の引渡ひきわたしが、1月7日に終わると、ステッセルは翌11日に家族を連れて旅順しゅんを発し

、15日に長崎に来て、18日にフランス船きこくで帰国の途に就いた。

乃木大将の北上

一方、我が軍においては、先づ捕虜ほりよ(24,369人)の輸送を終った後、1月13日に入城式にゅうじょうしきを旅順の新市街しがいで挙きよ行し、14日に水師營北方の高地で戦病死者の招魂祭しょうこんさいを行い、その日の午後から祝捷会しゅくしやうかいを開いて旅順攻囲の成功を祝こらいした。そして、乃木大将は、更に奉天の攻撃に参加する為に、1月24日、第一、第七、第九師団および野戦砲兵第二旅団などを率いて北上した。

ミスチenko 將軍の逆襲

さて、露軍の総司令官クロパトキンさかはいせんごは、前年10月14日の沙河の敗戦後、専ら兵力の補充ほじゆうに全力を注いで、その勢力を挽回しようと図っていたが、12月下旬になると、漸く優勢な兵力を奉天付近に集めるに至ったので、即ちミスチenko 將軍の騎兵団をもって我が最左翼を攻撃させた。1月2日、ミスチenko の部下はひそかに中立地きへいだん(遼河以西の地)を冒して海城付近に出没し、鉄道を破壊し、電柱を倒したりした上、11日には牛莊ニューチャンを襲い、營口にも迫ろうとしたが、我れの猛撃に遭って、遁走した。



こくこうだい たたかい  
黒溝台の戦

けれども、この方面における我が軍の守備の薄いことが彼れに分かったので、その25日には更に8個師団の大軍をもって黒溝台を襲って来た。わが守備隊はよく防戦したが、なにしろ僅かに騎兵一個連隊余と若干の歩兵とに過ぎなかったもので、いかんとも敵しかねて、その夜は一旦闇に乗じて退却した。それで、翌26日、第八師団長陸軍中将立見尚文がその師団兵を率いて黒溝台に向かうことになったが、兵力はなお寡少で、数倍の敵に当たらなければならなかったにもかかわらず、折から、降りしきる風雪の中で、連戦4日、惨憺たる苦戦を重ね、ついに同月29日の夜、必死の夜襲を執行して見事に雲霞の如き敵軍を撃退した。斯うして黒溝台は再び我が手に帰したが、これがために、我が軍は5,000以上の死傷者を出した。敵の死傷者は一万数千であったろうと言われる。将軍ミスチenkoも負傷した。

ほうてん たいせん  
奉天の大戦

こうして、わが左翼を突破して、あわよくば戦局面をも一変しようとした敵の企図が全く空しくなってしまった時に、我がほうはすでに旅順も陥落したので、いよいよ全軍を挙げて奉天攻撃を執行することにした。敵の総兵力は約650,000に対して我れの総兵力数は約400,000、戦線は東の本溪湖から西の運河に至る約160kmの長さにとどんでいた。我が最右翼には、旅順が開城した後、これまで第三軍に属していた第十一師団および後備第一、第四旅団をもって新たに編成した鴨緑江軍を配置したが、その司令官陸軍大将川村景明は、2月20日、諸軍に先んじて賽馬集方面から軍を進め、折からの風雪を冒して、

24日には清河城を占領した。

クロパトキンの狼狽

その勢いが頗る猛烈だったので、敵の総司令官クロパトキンは乃木大将の軍が全力を挙げてこの方面に迫って来たものと誤信し、予備隊および右翼の兵を割いてこれを防がせた。ところが、乃木大将の第三軍は最左翼となっていて、すでに遠く黒溝台の西方にまわっていたので、27日、更に進んでその北方の長灘方面の敵の右翼を襲った。

クロパトキンはこの意外な攻撃に周章狼狽、急にまた左翼から兵をかえしてこれを防がせたが、折から、我が右翼、中央、左翼の黒木、野津、奥の3軍もまた進撃を始めたので、敵は全線にわたって一時に混乱動揺し始めた。



## 第14話 日露戦争

### 露軍の混乱

こうして3月4日、乃木軍が防止する敵を撃退して、更に北方を指して進むと、奥軍もまたこれと連絡を保ちながら鉄道線路の西方を次第に北進して敵に肉薄した。敵軍は、見る見る全く包囲の中に陥るかの形勢となって来たので、クロパトキンはよんどころなく諸軍に令して、沙河の防御線を撤して、渾河の右岸によって我が軍の前進を食い止めようとした。わが野津、黒木の両軍は急に敵の正面を押しながら、鉄道線路の東方を北上し、最右翼の川村軍は敵の左翼を急撃して3月8日には馬群丹を占領し、翌9日には撫順を占領した。

### 奉天の陥落

こうして、我が諸軍が3面から一斉に進んで奉天に肉薄した時、乃木軍は更にまた陣地を転換して、その一部は遠く奉天の背後に迫った。敵の退路を絶とうとしたのです。敵の総司令官クロパトキンが、「予は包囲された」と本国に向って電報を打ったというのはこの時で、さすがに敵も防戦には大いにつとめたが、我が軍の勇猛果敢な突撃には敵しかねて、ついに9日の夕刻には全く総崩れとなって敗走した。

我が軍は3月10日に奉天を占領し、更に敵の逃げのを追って13日には興京を奪い、16日には鉄嶺を、18日には法庫門を、19日には開原を、21日には昌図を占領した。この時、敵はすでに遠くその北35マイルの四平街にまで逃げているので、ここに我が軍は初めて多少の休養をもつ事が出来た。

さて、奉天の大会戦における我が軍の死傷者は41,220で、敵の戦場に遺棄した死体は26,500を数えた。その他の死傷者は凡そ90,000以上であったろうといわれる。我が軍の捕虜になったものもナヒモフ少将以下40,000を超えた。なお、わが戦利品は一々数えられないほどでしたが、火砲だけでも100門を超えたのです。実にこの会戦は世界未曾有の大戦争で、陸上における日露両軍の勝敗は、この一戦によって全く定まったのですから、我が国では、その後、奉天占領の3月15日をもって陸軍記念日として、毎年、当時を追懐して士気を鼓舞することにしています。

さて、3月15日、わが満州軍総司令部は奉天に移ることになり、午後の4時ころ、総司令官 大山巖は幕僚以下を随えて堂々と奉天に入城した。この時、真っ先に押し立てて行ったのは五星旗でしたが、これは満州軍総司令部と四箇軍団との意味を五つの星で表したものだだったということです。

ところで、一方、海軍のほうはその後どうなったか？

### 遼東半島封鎖の解除

前にも述べたように、我が連合艦隊は旅順攻囲軍と終始協力して、常に海上から敵を威嚇し、警戒していたのですが、明治37年12月6日に203高地は占領されて、その後、間もなく敵の旅順艦隊が絶滅すると、東亜の海面にはもはや憂うものが何もなくなったので、東郷連合艦隊司令長官は、上村第二艦隊司令長官と共に帰京の途に就き、12月30日に着京、直ちに参内して会戦の経過をつぶさに奏上した。そして翌38年1月7日には、遼東半島の封鎖解除を宣言した。すでに旅順が開城したので、もはや遮断、監視の必要が無くなったからです。

バルチック艦隊の東航

ところが、一方、ロシアは、開戦のはじめに、旅順の艦隊が大打撃を受けて、爾来、常に守勢を執らなければならなかったのが、遽かにこれの挽回の計画を立て、明治37年4月30日、即ち我が第三回旅順閉塞の数日前には、早くもすでにバルチック艦隊の一部を割いて太平洋第二艦隊を編成し、遠くこれを東亜に送って、旅順、浦潮（ウラジオストック）の艦隊と共に相協力して我が海軍を圧伏させようとした。

ところが、その東航の準備に意外に手間が取れたために、出発はおおいに遅れて、同年10月の半ばになった。司令長官はロジェストウェンスキーでした。その月の末にアフリカの西北角で地中海に近いモロッコのタンジェルに着き、ここで艦隊は二つに分かれて、一隊はアフリカの南端喜望峰を迂回し、一隊はスエズの運河を経て、一月の初めに仏領マダガスカル島のノシベ湾で相会した。この時、旅順陥落の知らせが聞こえて、或いは東航艦隊の召還説なども伝わったためか、暫くそこに碇泊をつづけていたが、3月16日になって漸くまた解纜して航海をつづけた。

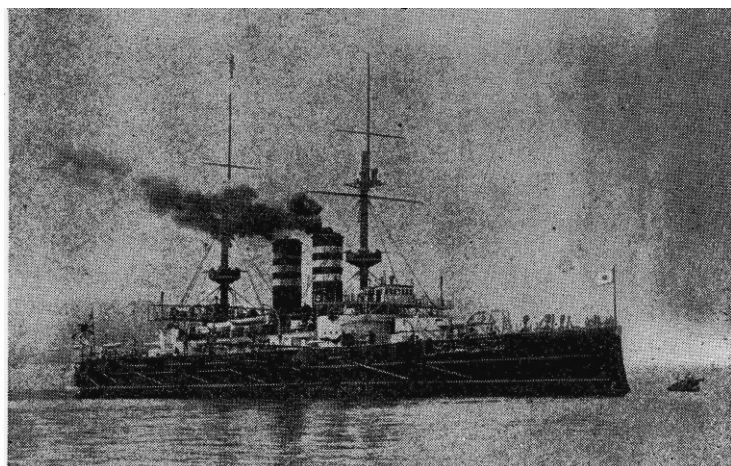
之より先き、ロシアは更にまた太平洋第三艦隊を編成し、海軍少将ネボカトフをその司令官として、2月15日に本国を出発させていた。それで、ロジェストウェンスキーの第二艦隊は、4月12日に仏領安南（現ベトナム）のカムラン湾に入ると、そこでこれを待ち合わせて、5月上旬に同じく安南のホンコへ湾外でこの後発の第三艦隊を併せた。こうしてバルチック艦隊は合してすべて38隻の一大艦隊となり、舳舻相衝んで、意気揚々と琉球列島の西方を過ぎ、一路直ちにウラジオストックに入ろうとして対馬海峡に向って来た。

敵を待つ我が艦隊

一方、わが連合艦隊は、さきに一旦帰京した東郷司令長官が、上村第二艦隊司令長官と共に2月初旬に帝都を辞して再び海上の任務に就いてから、主としてこのバルチック艦隊の東航に備えていたが、5月10日を過ぎて、敵艦隊がいよいよホンコへを出たことがわかると、すなわち一層緊張して対馬海峡を扼し、主力を韓国の鎮海湾に集め、数多の硝艦を海峡のところどころに放って敵艦隊の消息を探っていた。

敵艦見ゆ、東郷司令長官の信号

すると、5月27日の午前4時45分に五島沖を警戒していた硝艦信濃丸から、無線電で、「敵艦見ゆ。敵は東水道に向うものの如し。」という警報が来た。そこで、全艦隊は直ちに出勤して、敵艦隊を壱岐の東北方に当たる沖ノ島付近に迎えて一挙にこれを殲滅しようとした。わが連合艦隊は、この時、約40余隻の艦艇から成っていた。東郷司令長官は旗艦三笠に

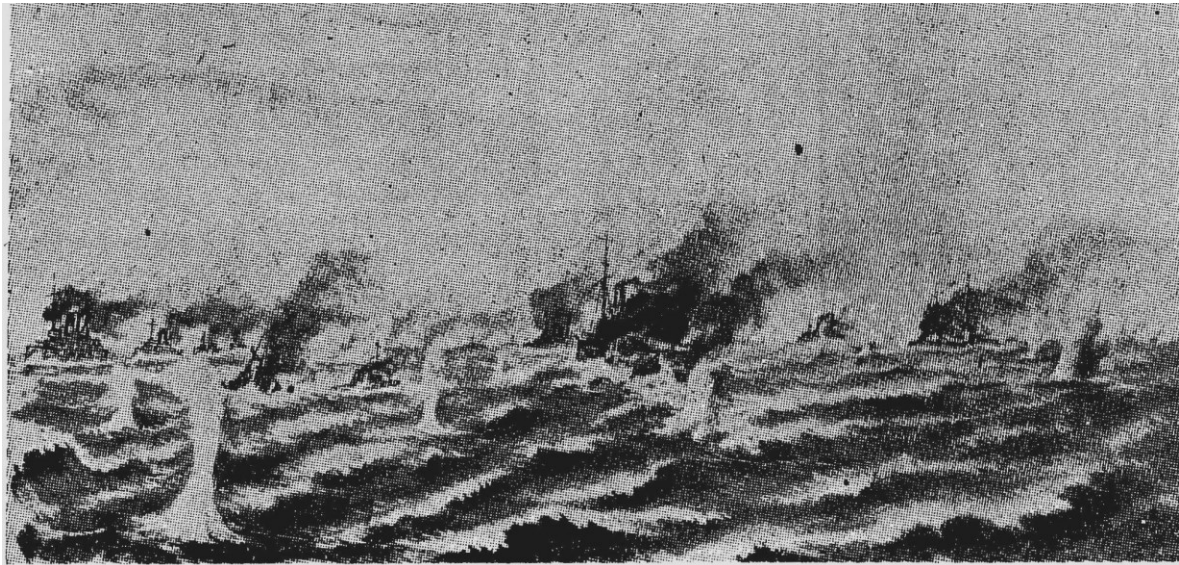


三笠艦

## 第14話 日露戦争

ざじょう しき こつこく とき す  
坐乗して全艦隊を指揮していたが、刻々と時が過ぎて、敵艦隊が次第に近づいて来ると、午後1時55分、  
しょうとう せんとうき ゼットき こうこく こうはいこのいっせん あ かくいんいつそうふんれい  
旗艦三笠の橋頭に高く戦鬨旗（Z旗）と共に、かの有名な「皇国の興廃此一戦に在り、各員一層奮励  
どりょく しんごう しき こぶ  
努力せよ。」という信号をかかげて士気を鼓舞した。

ぼうけん ゆうやくふんき し けつ ふんせん ちか  
各艦の将士はこれを望見して勇躍奮起、皆一斉に死を決して奮戦することを誓った。



にっぽんかい かいせん  
日本海 の 海戦

### にっぽんかい かいせん 日本海 の 海戦

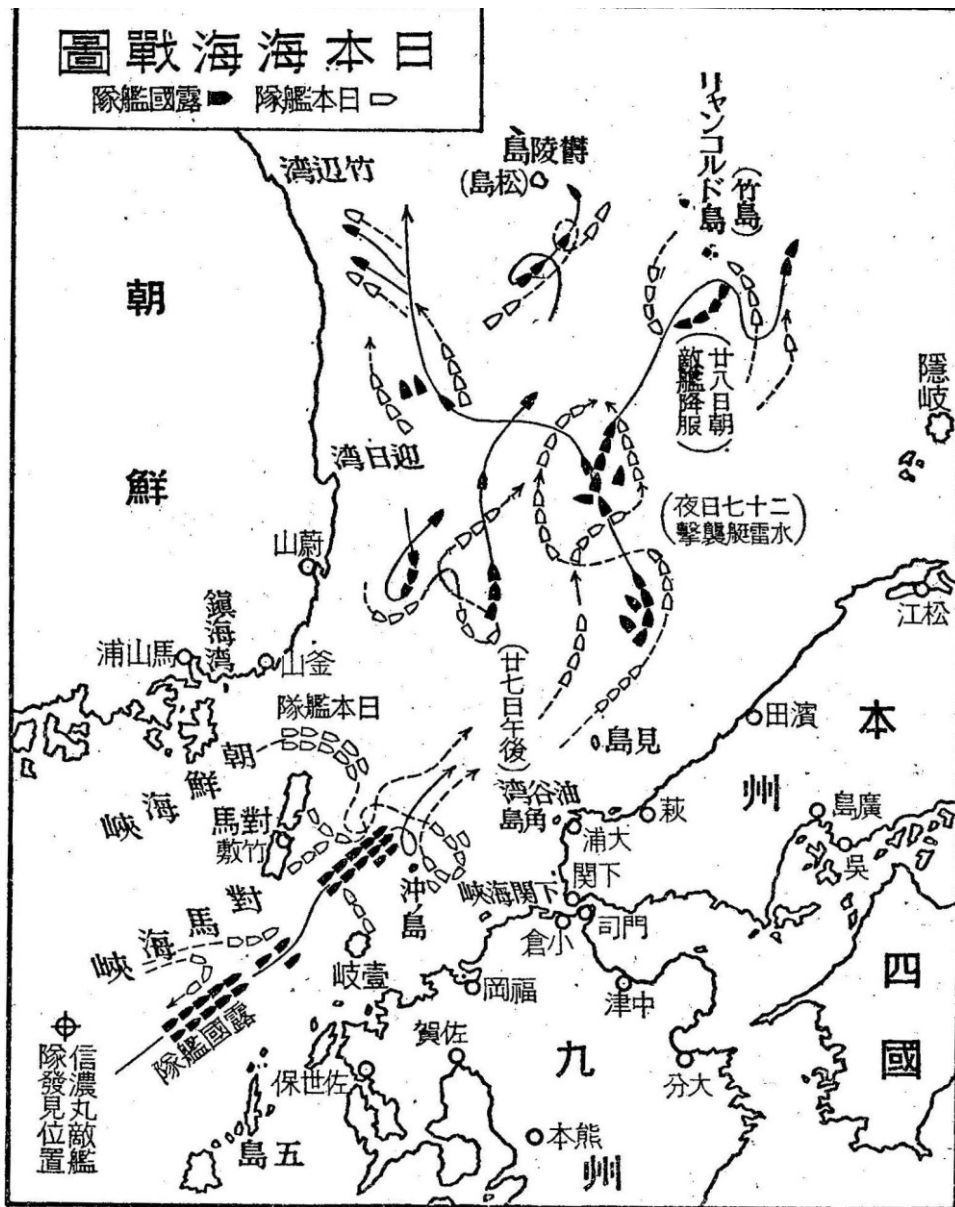
午後2時8分、砲火は先づ敵の先頭部隊から開かれたが、わが艦隊はすぐにはこれに<sup>おう</sup> 応<sup>ひ</sup>ぜず、<sup>ひ</sup> 彼<sup>が</sup> 我<sup>の</sup> 距<sup>きよ</sup>  
り 離<sup>り</sup>が6,000 m になるのを待って初めて<sup>もうぜん</sup> 猛然<sup>おうせん</sup>と<sup>かぜ</sup> 応<sup>なみ</sup>戦<sup>ちんちやく</sup>した。折<sup>ちやく</sup>から、風<sup>かぜ</sup>は強<sup>なみ</sup>く、浪<sup>なみ</sup>は高<sup>ちんちやく</sup>かったが、沈<sup>ちんちやく</sup>着<sup>ちんちやく</sup>  
して熟<sup>じゆくれん</sup>練<sup>れん</sup>な我<sup>が</sup>将<sup>しやう</sup>士<sup>し</sup>の奮<sup>ふん</sup>戦<sup>せん</sup>に、打<sup>う</sup>ち出<sup>だ</sup>す砲<sup>ほう</sup>弾<sup>だん</sup>は着<sup>ちやく</sup>々<sup>ちやく</sup>と命<sup>めい</sup>中<sup>ちゆう</sup>して、間<sup>ま</sup>もな<sup>な</sup>く敵<sup>てき</sup>の第<sup>だい</sup>二<sup>に</sup>戦<sup>せん</sup>隊<sup>たい</sup>旗<sup>き</sup>艦<sup>かん</sup>オス  
ラビア、第<sup>だい</sup>一<sup>いち</sup>戦<sup>せん</sup>隊<sup>たい</sup>旗<sup>き</sup>艦<sup>かん</sup>スワロフおよびアレキサンドル三世<sup>あいつ かさい お</sup>が、相<sup>あ</sup>踵<sup>い</sup>いで火<sup>か</sup>災<sup>さい</sup>を起<sup>お</sup>こして戦<sup>せん</sup>列<sup>れつ</sup>を離<sup>はな</sup>れたのみ  
ならず、その他<sup>しよかん</sup>の諸<sup>りくぞく</sup>艦<sup>かん</sup>も陸<sup>りく</sup>続<sup>ぞく</sup>と火<sup>か</sup>災<sup>さい</sup>を起<sup>お</sup>こした。忽<sup>たちま</sup>ち敵<sup>てき</sup>の陣<sup>じん</sup>形<sup>けい</sup>は全<sup>ぜん</sup>く、乱<sup>みだ</sup>れて、午後3時ごろには早<sup>はや</sup>  
くもすでに勝<sup>たいせい</sup>敗<sup>たいせい</sup>の大<sup>だい</sup>勢<sup>せい</sup>が決<sup>けつ</sup>したのです。

敵<sup>あ</sup>は或<sup>ある</sup>いは逃<sup>に</sup>げ、或<sup>ある</sup>いは南<sup>しん</sup>方<sup>ろ</sup>に進<sup>てん</sup>路<sup>ろ</sup>を転<sup>う</sup>じて、右<sup>う</sup>往<sup>おう</sup>し、左<sup>さ</sup>往<sup>おう</sup>したが、わが艦<sup>た</sup>隊<sup>くわん</sup>は巧<sup>た</sup>みにそ<sup>た</sup>の行<sup>た</sup>く手<sup>て</sup>を  
さえぎ 遮<sup>しやく</sup>って、しきりに猛<sup>ちん</sup>撃<sup>げき</sup>を加<sup>か</sup>え、ついに其<sup>に</sup>の日<sup>にち</sup>没<sup>ぼつ</sup>ま<sup>ぼつ</sup>で戦<sup>せん</sup>艦<sup>かん</sup>オスラビア、アレキサンドル三世、ボゴロチ  
ノ、スワロフおよび仮<sup>か</sup>装<sup>そう</sup>巡<sup>じゆん</sup>洋<sup>よう</sup>艦<sup>かん</sup>ウラルなどを撃<sup>げき</sup>沈<sup>しん</sup>した。

更<sup>さら</sup>に夜<sup>や</sup>に入<sup>い</sup>ってからは駆<sup>く</sup>逐<sup>じやく</sup>隊<sup>たい</sup>および水<sup>すい</sup>雷<sup>らい</sup>艇<sup>てい</sup>隊<sup>たい</sup>に夜<sup>や</sup>襲<sup>しゆう</sup>を決<sup>けつ</sup>行<sup>こう</sup>して、戦<sup>せん</sup>艦<sup>かん</sup>ナワリンを轟<sup>ごう</sup>沈<sup>しん</sup>し、戦<sup>せん</sup>艦<sup>かん</sup>シソイ  
ウエルキー、装<sup>せん</sup>甲<sup>こう</sup>巡<sup>じゆん</sup>洋<sup>よう</sup>艦<sup>かん</sup>ナヒモフ、モノマフの3隻<sup>さんしゆう</sup>に戦<sup>せん</sup>鬨<sup>こう</sup>および航<sup>かう</sup>海<sup>かい</sup>の能<sup>のう</sup>力<sup>りよく</sup>を失<sup>う</sup>せ<sup>しな</sup>せた。

### てき しれいちようかん しれいかんい か ほかく 敵の司令長官および司令官以下の捕獲

また、この日、旗<sup>き</sup>艦<sup>かん</sup>スワロフに坐<sup>ざ</sup>乗<sup>じよう</sup>していた敵<sup>てき</sup>の司<sup>し</sup>令<sup>れい</sup>長<sup>ちやう</sup>官<sup>かん</sup>ロジェストウェンスキー中<sup>ちゆう</sup>将<sup>じやう</sup>は、同<sup>どう</sup>艦<sup>かん</sup>の沈<sup>しん</sup>  
ぼつ 没<sup>ぼつ</sup>前<sup>ぜん</sup>に重<sup>じゆう</sup>傷<sup>しゆう</sup>を受<sup>う</sup>けて駆<sup>く</sup>逐<sup>じやく</sup>艦<sup>かん</sup>ブイヌイに乘<sup>し</sup>り移<sup>い</sup>り、その後<sup>ご</sup>の敵<sup>てき</sup>の全<sup>ぜん</sup>艦<sup>かん</sup>隊<sup>たい</sup>の指<sup>し</sup>揮<sup>き</sup>は、ネボカトフ少<sup>しやう</sup>将<sup>じやう</sup>がこれ  
に代<sup>はい</sup>わっていたが、彼<sup>は</sup>その夜<sup>や</sup>、敗<sup>はい</sup>残<sup>ざん</sup>の戦<sup>せん</sup>艦<sup>かん</sup>ニコライ一世<sup>いち</sup>、アリオール、巡<sup>じゆん</sup>洋<sup>よう</sup>艦<sup>かん</sup>イズムルード、海<sup>かい</sup>防<sup>ぼう</sup>艦<sup>かん</sup>  
アブラクシン、セニャーウインの5隻<sup>ごしゆう</sup>を率<sup>ひそ</sup>いて、密<sup>ひそ</sup>かに我<sup>が</sup>駆<sup>く</sup>逐<sup>じやく</sup>隊<sup>たい</sup>および水<sup>すい</sup>雷<sup>らい</sup>艇<sup>てい</sup>隊<sup>たい</sup>の包<sup>ほう</sup>圍<sup>い</sup>襲<sup>しゆう</sup>撃<sup>げき</sup>の中<sup>な</sup>から脱<sup>だつ</sup>  
しゅつ 出<sup>しゅつ</sup>してウラジオストックに向<sup>むか</sup>った。



ところが、翌28日の朝、鬱陵島付近で待ち構えていた我が主力艦隊の包囲に遭うと、もはや抵抗することの出来ないのを知って、すなわち白旗を掲げて降服した。ただイズムルードだけは、その快速力を利用して逸早く逃げ去ったが、後にウラジオストック近くのウラジミール湾で浅瀬に乗り上げて擱座破壊した。

また、かのロジェストウェンスキー中将はブイヌイから更に駆逐艦ベドウィに移乗していたのですが、この日の午後、わが駆逐艦連、陽炎の2艦が、それとも知らずにベドウィを追撃すると、この艦もまた白旗を掲げて降を乞い、ロジェストウェンスキー中将以下幕僚は皆わが捕虜となった。

### 敵艦だけの損害

なお、露艦の最後を一々ここに述べ立てるのは煩わしいから省略するが、要するに、戦闘は僅かに2日間で、敵艦の撃沈されたものが19隻、捕獲されたものが5隻、押収されたものが1隻で、その他は逃走後、あるいは破壊し、或いは沈没し、或いは中立港に入って武装を解かれ、はるばると目指して

来たウラジオストックに逃げおおせたものは、僅かに巡洋艦 1 隻、駆逐艦 2 隻の 3 隻に過ぎなかったのです。 また、敵の戦死者は四千数百名といわれ、捕虜は司令長官、司令官以下 6,106 名にのぼった。

一方で我が艦隊の損害は、僅かに水雷艇 3 隻を失っただけで、戦死者は 116 名、負傷者は 538 名に止まった。

いちだい きせき  
一大奇蹟

なんという顕著な勝敗だったでしょう。 実に日本海の海戦は、有史以来はじめての大海戦であって、その勝利もまた嘗て前例のない大勝利でした。 これが一大奇蹟として各国に感嘆され、名将東郷平八郎の名が一朝にして世界に響き渡ったのに何の不思議がありません。 しかも、東郷司令長官は、この時、大本営に電奏した公報の末段において次のように述べている。



とうごうへいはちろう  
東郷平八郎

この対戦に於ける敵の兵力、我れと大差あらず。 敵の将卒もまた祖国のために極力奮闘した事を認める。 然れども我が連合艦隊が克く勝を制して前記の如き奇蹟を収め得たのは、一に天皇陛下の御威稜の致す所にして、固より人為の能くしたもては無い。 殊に我が軍の損失、死傷の僅少なものは、歴代神霊の加護に依るものと信仰する外なく、先きに敵に対して勇進敢戦した麾下将卒も皆この成果を見るに及んで、唯々感激の極を表現できない。

これは実に我が忠勇無二な軍人の信念を披瀝したもので、同時にまた、我が国民の古来の伝統精神を明々地に発揚したものです。

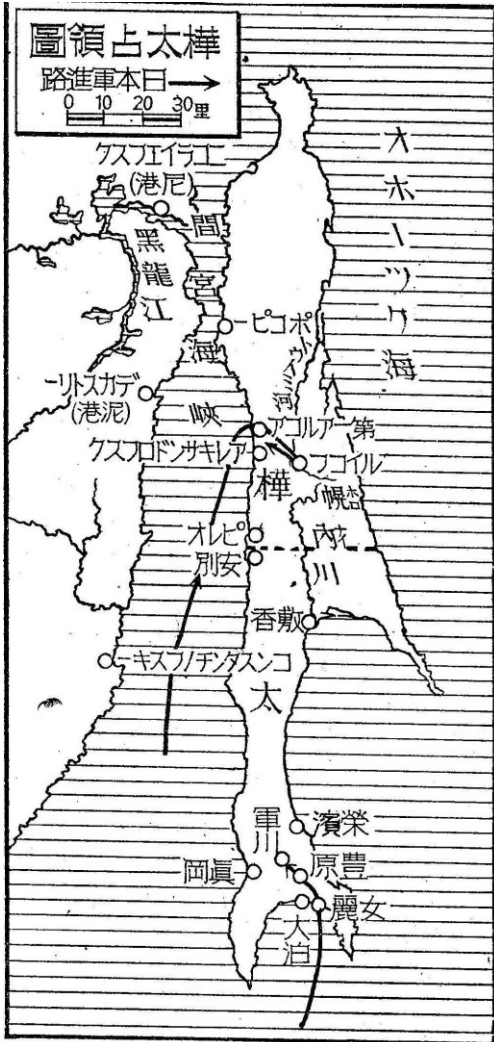
なお、その後、我が国では、毎年 5 月 27 日をもって海軍記念日とし、この大海戦の勝利を追懐しています。

とうごうたいしやう てきしやういもん  
東郷大将の敵将慰問

ところで、もうひとつ、この大海戦の余談として皆さんに話しておきたいのは、越えて 6 月 3 日、東郷大将が敵の司令長官ロジェストフスキー中将を、その収容されている佐世保の海軍病院に見舞った事です。 この時、中将はかなりの重傷で、身動きすら容易ではなかったが、大将の見舞いを大いに喜び、辛くも身を起こして固く握手を交わした。 そして大将が懇ろに慰問の言葉を述べて、一日も早く快癒される事を望まれたのに対して、中将は厚くその好意を謝し、感涙をさえ浮かべながら、わが艦隊の精鋭を称え、負傷を却って名誉とする旨を答えた。 勝って驕らない大将と、敗れて重傷の床に敵を称えた中将との会見は、思うに、かの水師営における乃木大将とステッセルとの会見と相並んで、まことに感

がい ふか げきてき そうぞう  
 慨の深い、劇的なものであったろうと想像されます。

さて、我が大本营では、すでに奉天の大会戦で敵の陸軍を遠く北方に駆逐し、今また日本海の海戦で敵の艦隊を殆ど全滅させてしまったので、更に新たに樺太攻撃軍を編成して、陸軍中将 原口兼濟をその司令官とし、又、北遣艦隊を組織して海軍中将 片岡七郎をその司令官とし、互いに協力して樺太を占領させる事にした。



からふと せんりょう  
**樺太の占領**

明治38年7月7日、この攻撃軍の一部である南部上陸部隊は、北遣艦隊の援護の下に先づコルサコフ（昭和初期の大泊）の東方に上陸し、翌8日、何らの抵抗をも受けずにコルサコフを占領してから、到るところに敵を破って、12日にはすでに樺太南部の占領を確実にした。この間に、北部上陸部隊もまた出動して、同じく北遣艦隊の援護の下に、24日、当時、全島の首府であったアレキサンドロフスクの北方に上陸、即日、アレキサンドロフスクを占領してから、この部隊もまた着々と敵を破り、敵将リャブノフを降して、31日には遂に全く全島を略定した。

べいこくだいとうりょう こうわかんこく  
**米大統領の講和勧告**

これより先き、アメリカ合衆国の大統領ルーズベルトは、すでに奉天の大勝および日本海の大勝によって、戦局は一段落がつき、明らかに日本の優越が証明されているのに、この上なお戦闘をつづけるのは無用でもあり、人道のためにもよろしくないというので、明治38年6月9日、日露両国の政府に向って講和を勧告した。わが政府は初めから平和を希望していたのですから、

翌10日、直ちにこれに応じ、露国もまた13日に至ってこれに応じたので、すなわちアメリカ合衆国ニューハンプシャー州ポーツマスにおいて講和談判を開くこととした。そこで、我が国は外務大臣 小村寿太郎と駐米全権公使 高平小五郎を全権委員に任命し、露国は前大蔵大臣ウィッテおよび駐米大使ローゼンを全権委員とした。

小村全権は7月8日をもって東京を出発し、ウィッテは同月19日、露都を出発した。そして8月9日、両国全権委員は米国のポーツマスの海軍鎮守府ではじめて第1回正式会見を行い、その翌日から談判にかかった。

ポーツマス条約の締結

ところが、露国は連戦皆敗れて和を講じることになったにも拘わらず、その全権は、日本軍がまだ一步のロシアに入っていないとの理由で、自ら敗戦者と認めることを肯んぜず、わが提出した講和条件の殆ど各条について、不同意を表し、或いは異議を唱えた。

ことに割地と償金とは絶対にこれを拒んだので、容易に相互の意見がまとまらず、一時は殆ど談判は破裂しそうになった。

しかし、第11回目(8月29日)の会見で、我が国が償金の要求を撤回して大譲歩すると、彼れも樺太南半の割譲を承諾して、ここに漸く彼我の意見の一致を見た。

そこで、9月1日、先づ休戦条約を結び、ついで9月5日に講和条約の記名調印を終えた。世にこれをポーツマス条約と言う。すべて15か条から成っていたが、その要項は次の通りです。

1. 露国は日本が韓国において政治上、軍事上、経済上の卓絶な利益を有することを承認し、日本が必要と認める指導、保護および監理の措置を執るに当たって、これを妨げたり、これに干渉しない。
2. 露国は満州において清国の主権を侵害し、又は機会均等主義を相容れないところの利益は全くこれを持たない。
3. 露国は清国の承諾をもって旅順港、大連およびその付近の領土および領水の租借権を日本に譲り渡す。
4. 露国は長春、旅順口間の鉄道本支線、炭鉱を清国の承諾をもって日本に譲り渡す。
5. 露国は樺太島の北緯50度以南およびその付近の諸島嶼を日本に譲り渡す、
6. 露国は日本海、オホーツク海およびベーリング海に瀕する領地の沿岸における漁業権を日本国民に許与する。

こうして、この条約は、日露両国君主の批准を経て、10月14日、アメリカ合衆国の首府ワシントンでその交換が行われ、わが国では、同16日に公布されたが、それと同時に、天皇は平和克服に関する勅語を下し、勝ちに狂れて驕ることのないようにと深く国民をい戒められた。

平和克服、諸軍の凱旋



米国 ポーツマス 日露講和会議

右列: 左から3人目が 小村寿太郎、高平小五郎  
左列: 左から3人目が ウィッテ、ローゼン



さて、すでに講和条約が締結されると、9 月以降、我が陸海の将士は陸続と凱旋したが、10 月 22 日には神奈川沖において凱旋諸艦艇の大観艦式が行われ、11 月 14 日には、天皇は親しく伊勢の大 廟 に平和の克復を報告された。そして、12 月 7 日に満州軍総司令部が帝都に凱旋すると、やがてその 20 日に大本営の解散を仰せ出され、翌 明治 39 年 4 月 30 日、東京青山の練兵 場 で凱旋各軍代表 部隊の大観兵式が行われた。

### 戦 勝 の 効 果

こうして、日露の大役はここに首尾よく終わりを告げたのだが、顧 みれば前々年の 2 月、東洋の平和のために、わが国が敢然としてロシアと戦いを開いた時には、世界の列国は斉しく我が国の敗戦を予想し、むしろ無謀とさえ考えた者もあつたくらいでした。ところが、事實は全 くにこれに反して、開戦以来、文字通りの連戦連 勝 で、ついに世界屈指の強 大国といわれたロシアを屈服させたのです。列国の驚嘆が実に 夥 しいものであつた事は言うまでもありません。

### 世 界 一 等 国 の 列 に 入 る

ただ講和に当たって、償 金は取れず、割地も僅かに樺太の南半を得ただけだったので、国民の多くはその予期に反したのに失望した。しかし、この戦 勝 によって、我が国は大いに国威を海外に輝 かせたのみならず、我が国の承 諾 しないところを東亜において他国に行わせない実 力 のある事を 証 明した。

かのヨーロッパの 6 大強国がその承 諾 しない事をヨーロッパにおいて行 わさせず、又、アメリカ合衆国がその承 諾 しない事を両米大陸において行わせないので世界の一等国であるのと同じ理由で、日本もまた一等国の列に入ったのです。この大きな効果ははるかに条約以上のもので、とても物 質 上の利益などは比べものにならないのです。

### 大 勝 を 得 た 理 由

とはいえ、それもこれも、もとより天皇の御 稜 威によることは勿論だが、また将士の 忠 勇と国民の後援とが相俟って君国に尽くした為です。実にこの役の間、国民は増税の負担に甘んじて、進んで戦時公債に応募し、また、赤 十 字社は敵身方の別なく 救 護につとめ、愛国婦人会は出 征 軍人およびその家族の慰問、戦 病 死の 弔 意などの全力を注いで、挙国一致、いわゆる銃 後の守りを全 うしたのです。

( 第 14 話 日露戦争 終わり。 次は前頁に戻り、第 15 話 戦後の経営 )